

ピリピ人への手紙2章1-4節 「へりくだりによる一致」

1A へりくだりにある一致 1-4

(2A キリストにある心構え 5-11

1B 他者のための特権 5-6

2B 奉仕と犠牲 7-8

3B 栄光への引き上げ 9-11)

本文

ピリピ人への手紙 2 章に入ります。ピリピ人への手紙にある、パウロが最も使っている言葉は「喜び」です。主にある喜びです。しかも、牢獄に入れられているという逆境の中でなおのこと出てくる喜びであります。そして、それはパウロが「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」と告白した、キリストとの交わりが支えとなっています。この方のみを見つめ、この方に全てを捧げ切っているという献身に基づく交わりに、喜びの源があります。そしてこの地上のことではなく、死ぬこともまた益ですと言わしめる、天地が滅びてもなおのこと残っている神の国のことを思っているからこそ、得ることのできる喜びです。

そこで、パウロは 1 章 27 節から御国の市民という話を始めました。ピリピというのは、ローマの植民都市であり、都市国家でありました。ローマのモデル都市としての誇りを持っていて、そこに属し、その義務を果たすことを一人一人が主体的に行なっていました。私たちに分かり易く話すなら、自ら犠牲を払って家族のために尽くす、あるいは、スポーツ選手が自ら進んで、その犠牲を払って訓練を受けることにつながります。そして大事なのは、それがチームで行っているということです。「霊を一つにして、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており(1:27)」と言っています。団体競技で、自分がしたいこと、自分が願っていることを優先させるならば、一気に負けてしまいます。そうではなく、全体を見ながら自分が置かれているところを考えて、それで全力を尽くす時に、反対者に対抗することができるのだということです。教会も同じなのだということをパウロは言っています。教会に対して御霊が語られていることに聞き、導かれ、そして自分の与えられている分をしっかりと果たすのです。自分に何ができるか、ではなく、主が何をこの御体によって示しておられるか、を知ることです。

1A へりくだりにある一致 1-4

そこでパウロは、本格的に彼らに勧めを行っていきます。

2:1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、2:2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。

思い出していただきたいのですが、パウロはこの手紙を親愛の情を込めて書き始めたということです。ピリピの人たちが自分に何度となく愛の捧げ物を彼に送ってくれました。物欲しさにそういったのではなく、その捧げる思いの背後にある、彼らの霊的な実を見ることができたのです。ですから、パウロは自分が使徒であることを主張する必要がなく、なぜなら、彼らはすでに彼をそのようにみなし、尊敬していたので必要がなかったのです、兄弟として打ち解けた雰囲気の中で手紙を書くことができました。

けれども、パウロは彼らの霊的成長を願っていました。1章9-10節で、彼らの愛に真の知識と識別力がついて、その愛がいよいよ豊かなものになることを願っています。彼らの愛が純粹であることは疑いもない事実ですが、その愛に成長が必要でした。それは子が親を愛する愛から、親が子を愛する時の愛に似ているでしょう。そして、キリストが来られる時に純真で非難されることのないものになるように、と祈っています。ですから、主の再臨を待ち望むその信仰には、普段の霊的成長の努力、自分が変わっていくという過程を惜しまない姿勢が含まれています。

そこでパウロがまず知ってほしかったのは、先ほど話した「反対者が存在する」ということです。ピリピでパウロが苦しみを受けましたが、彼らも苦しみを受けていました。しかし、それは神から与えられた賜物であって、キリストも同じように苦しめられたのです。

そして彼は今、外の問題を話しているのではなく、教会の中で起こっている内の問題を話しました。4章2-3節を読みます。「ユウオデヤに勧め、ストケに勧めます。あなたがたは、主にあって一致してください。ほんとうに、真の協力者よ。あなたにも頼みます。彼女たちを助けてやってください。この人たちは、いのちの書に名のしるされているクレメンスや、そのほかの私の同労者たちとともに、福音を広めることで私に協力して戦ったのです。」二人の女性の働き人がいました。その二人の間に対立がありました。けれども、パウロは、彼女たちは本当に真実に福音を広める同労者であるとほめています。そうです、それぞれ主の働き人として誠実に仕えている人たちの間にも、このような不一致があったのです。だから、どちらが教会で主要になれるのか、その競争を知らず知らずのうちにやっていました。

加えて、他の兄弟姉妹への無関心という問題があります。「2:20-21 テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもいないからです。だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。」これは、おそらくピリピの教会の問題というよりも、むしろパウロのいるローマの教会のほうで起こっていた問題だったのかもしれませんが、自分のしていることで精一杯で、他の兄弟姉妹と共に同じ心になって動かず、ばらばらになっているということです。言い争いが起こっていなければ平和であると多くの人々は思いますが、いいえ、黙って各人が勝手なことをしている家庭は、いかがでしょうか、平和とは程遠い姿です。けれども、教会は実にそのような、愛の冷えた状態になり得るのです。

もう一度1節を見てください、「もしキリストにあって励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、」と言っていますが、この「もし」というのは、仮定というよりも、事実そうなのですから、という意味合いが強い言葉です。

パウロは1章で、キリストにある励ましについての話をしていましたが、これはピリピの人々も共有するものです。「キリストにあって励まし」とありますが、この励ましは、イエス様が聖霊のことを話す時に「もう一人の助け主」と呼ばれた、助け主のギリシヤ語と同じ言葉、パレクレーシスが使われています。つまり、「そばにいて援助する」という意味です。私たちにとって、何をもって励まし、あるいは慰めとなるのでしょうか？それは、共におられるキリストが信仰の目の中ではっきりとすることです。福音書で書かれているイエス様、聖書全体で証言されているイエス様が、私たちのそばにおられるのだという、その親しい接近こそが、私たちの魂の慰めと励ましを与えます。

そして、「愛の慰め」と言っています。愛によって慰めが与えられます。このことを、私たちは礼拝において、雅歌を通してじっくり学びました。私たちが起こしている問題、教会の外の世においても、また教会内で起こることにしても、すべての問題の根っこには、愛の保証の欠如があるということをお話しました。これから一致について話しますが、一致というのは決して、「全ての人と同じ」という意味ではありません。むしろ神の愛と恵みは、特別にある人に注がれるものです。田舎娘のシュラムの女が、自分の肌が黒いと言っている中で、そして他の宮廷の色白で美しい女たちがいる中で、とても不安に思っていたのですが、ソロモンはありったけの愛情で、彼女を守りました。「わが愛する者が娘たちの間にいるのは、いばらの中のゆりの花のようだ。(雅歌 2:2)」他の娘たちを茨と言わしめるほどの、特別な愛です。

しかし、私たちは「平等化された愛」の中に生きようとします。ある人が特別に愛を受けるということは、不公平であるとします。そして特別に愛されている者を祝福するのではなく、妬みます。先日、日本で牧会している宣教師の人が少し悩んで分かち合ってくれました。母の日のことですが、礼拝でお母さんたちを祝福しようと用意していたところ、「お母さんではない人たちが、傷つくかもしれない。」とって反対されたそうです。いいえ、お母さんたちを素直に祝福すればよいのです！なぜだれかを祝福することが、他の人たちをないがしろにすることなのでしょう？そこには、自分が神から特別に愛されているという守りが存在しないからです。これは人間的な、人々を平等にしようとする愛と、神の恵みや愛との違いをよく表しています。神の恵みというのは、多く持つ者がさらに豊かに与えられ、持たない者は持っているものまで失うという、差別性を持っています。そして豊かに与えられた者であるからこそ、惜しみなく愛をもって他者に与えるという奉仕をすることができます。ミニストリー、奉仕の務めは、もっぱら与えることに徹しています。ですから、みなが同じにならないといけない、というのは聖書の言っている一致ではありません。ここにある、惜しみなく与える神の愛、その特別な愛によって慰めを受け、守られているということです。

そして、「御霊の交わりがあり」と言っています。御霊によって交わるというのは、私たちの深いう

めきのところでも、完全に神との交わりを可能にしてくれる、御霊の取り計らいのことです。「ローマ 8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いやうもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ。」私たちの思いを超えて、思いと心を守ってくれる神の平安があります。言葉に言い表すことのできない、栄えに満ちた喜びがあります。人知を超えた神の愛があります。そして、私たちが神の子供というのも、理屈ではなく、御霊がそう証して下さっているからです(ローマ 8:15-16)。

そして、「愛情とあわれみがあるなら」と言っています。ここの「愛情」は、パウロが 1 章 8 節で使った「慕っている」と同じ言葉です。「肝」を意味します。肝臓から、あるいは腹から愛情を持っているということです。先日、ある牧師さんと話しました。誰かが教会からいなくなることについて、もし教会がお店のようなところであれば、「自分のお店が気に入らないで出ていく」ということは、当たり前のことでしょう、と言っていました。けれども、牧師は違うね、と言っていました。その通りです、愛情と憐れみがあるなら、私たちの心は傷つきやすく、心配もします。相手のことを思って、泣きまします。もちろん、頭では主がなされていることなのだ、と理解できます。だから、そのことを受け入れると同時に、慕っていた心が泣くことも神の御心なのです。

そこで一致の話をするのです、もう一度 2 節を読みませ。「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」パウロは、喜びで満ちている話をしました。そして、パウロの近辺でも、妬みによってパウロをもっと貶めながら、福音を語っている者たちがいました。けれども、福音が宣べ伝えられているではないか、ということで、それで主にあって喜んでる姿が書かれています。けれども、その妬みが教会の中にも見えることは残念です。彼は、自分の愛している仲間には一致を見たいと願っています。

一致を保つには、「同じ愛の心を持ち」ませ。そして「心を合わせ」とありますが、これは「思いを合わせ」ということです。そして、「志を一つ」とありますが、これは意志のことです。つまり、愛という感情面においても、思いという知性においても、志という意志においても、一つとなっているようにと教えています。つまり、ここではっきりしているのは、「人間的に調子を合わせることによって、一つになることはできない」ということです。自分が他の人々の意向に合わせていても、結局は、「自分」というものを守りながら動いているので、一つになることはできません。一つになっているところには、「自分」が失われていないとできません。自分を忘れてる、ということです。

ですから、パウロはキリストにある励ましから始まる、一連の神との交わりについて話していたのです。主イエス・キリストにある交わりがあつてこそ、愛情と憐れみという実が結ばれて、その心の態度があるからこそ、自分を忘れることができます。それで一つになることができるのです。すべては、神と自分との間にある縦の関係から始まっています。横の関係はその後に来るのです。

2:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と
思いなさい。2:4 自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。

パウロはこれから、主にある喜びを保つため、また満たされるための秘訣について話します。1
章では、「ただキリストを思う」という一途な思いに喜びがあることを知りました。2章では、「従わせ
る」あるいは「服従する」ということにキリスト者の喜びがあることを見ていきます。これから、キリス
トご自身の模範を見て、それから使徒パウロの心構え、そしてテモテ、それからピリピの教会の指
導者エパフロデトの自らを従わせる姿勢を見ていきます。

一致を保つことができるようになるのは、一重に「自己中心」とは反対の「へりくだり」です。自分
のことではなく、キリストのことを思うことです。そしてキリストにあつて他者のことを思うことです。
前回の学びの交わりの中でも話しましたが、確かアンドリュー・マーレーが言った言葉ですが、「へ
りくだりとは、自分を卑下することではなく、自分を忘れることである。」といました。自分はできて
いない、駄目なのだというのはへりくだりではありません。むしろ高慢ですらあります。自己憐憫と
いうのは、未だ自分のことばかりを考えているのであり、自己中心的です。自分を神と隣人のため
に忘れていないこと、それがへりくだりの結ぶ実であります。

「自己中心」とありますが、この日本語の意味合いで受け取ると、誤解してしまいます。すべては
キリストから始まり、神の恵みによって成り立ち、神の召しによって教会は形成されます。一見、良
いとみなされているものでも、私たちはいつも、心の思い計りを調べて、実は良いことではなく、神
の教会への一致を壊してしまっているものがあることに気づかないといけません。例えば、「私は、
神からこのような賜物が与えられている、だからこの賜物をもってこの教会に貢献しよう。」という
ものです。その主語は、英語にすれば明らかですが、「私」なのです。「私はこうした能力がある
から、この教会で使ってもらおう。願わくば、雇ってもらおう。」という世の中の団体や会社と同じよ
うな発想になっている場合があります。

しかし、その反対が必要なのです。つまり、自分が持っているものを発揮するのではなく、自分
が持っているもので何をあきらめるか、ということであり、自分の可能性を探るのではなく、自
分の可能性を捨てるということです。つまり、神のゆえに自分を捨てるのです。

自分のしていることが、神の恵みによるものなのにそれを自分のものにしていくことが、自分の
使命であると思っている場合もあります。ある妊娠しているお母さんが、このように叫んだというこ
とを聞いたことがあります。「お腹の子の赤ちゃんは、私の一部なのよ。」一見、それは無私の母
の愛のように聞こえます。自分が育て、自分が愛して、となっているのですが、これは実は「自分
自身を愛している」ことに他なりません。つまり献身的、犠牲的な愛においてさえ、それを我が物
にしているという自己中心性が強く働いていることもあるのです。自分が世話するのではなく、キリス
トこそがその人を育てることができる。だから、私がキリストの御心に明け渡し、その人をキリス

トに導くのだ、という自分を捨てた行為こそが、むしろその人をこよなく愛していることになるのです。

そして、自分を捨てられないでいると、「私はこれこれのことができるのに、どうしてやることができなないのだ。」というような思いを捨てられないでいると、その心はだんだん虚しくなっていきます。喜びがなくなっていく。自分というものを捨てられない、そのまま持ってしまった状態で動いていると、教会生活でも次第に喜びがなくなってしまうのです。

そして、自己中心には、「する」ことだけでなく「しない」ことも含まれます。つまり、主から与えられた恵み、その務めがあるのに、自分の都合に合わない、自分の生活が崩れるなどの理由によって、その責任から免れようとする自己中心性です。その人は、一見、何もしていないのできれいなように見えます。そして、あることをしている人は、もしかしたら弱さがあるし、人から拒否されるかもしれないし、逃げるのです。モーセが神から召された時に、自分の言うことをイスラエルの民は聞いてくれる訳がないとして、断りました。そうした自己中心性です。

イエス様の弟子たちの足を洗うという場面に、自己中心性の中における無私の行為があります。あそこで描かれているのは、実は「面目」や「自尊心」の問題なのです。足を洗うということは、誰かが必ずしなければいけないものでした。けれども、それは僕の行なうことでした。つまり、普通の人がやりたがらない仕事なのです。だから、自分がやったら他の人たちからどう思われるのか、気づいているけれども、やるのはどうも気が引ける、というものなのです。だから、別に手を汚す仕事のみならず、自分がやったら恥ずかしい思いをするかもしれないというそういう奉仕であれば、何でもそうであります。そうしたことの務めを担うためには、必ずキリストによる神の恵みがなければ、それを行なうことはできません。

そこで次に、「虚栄」が来ます。これは、「実質がないのに、それでも自分のしたいことをしてみる」ということです。そこには、神の召しがない。神から何を言われたのか、ということよりも、自分が何かができると思っています。どんなにできるとしても、そこには神の御心がないので、実質がないのです。そこでは自我だけが残ってしまい、聖霊の油注ぎがないので虚しくなってしまうのです。それで、主にある喜びがなくなります。

そこで、「へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」となります。へりくだる、ということの意味がかなりはっきりしてきたかと思いますが、それを経ると、相手を自分よりも優れた者と見ることができます。今まで他者を批判し、見下していても、自分自身がやって見て、それでどんなにできないかを知って、神の恵みを知ります。そして神の恵みを知ると、他に召されて行なっている人々を心から尊敬できるようになります。私の場合は、宣教師や牧師でした。宣教師については、「何を傲慢にも、この日本に来て人々を教えようとするのか。」という思いがありましたし、牧師についてもいろいろ否定的な思いがありました。しばしば、インターネットでも教会についての批判が書かれていますね、確かにその通りでしょう。しかし、では自分はどうなのか？と問うため

には、へりくだりが必要なのです。自分がここで宣教の働きをして、ことごとく自分ができないことを知って、それで今は、最も尊敬する人々として宣教師がおり、また日本のすべての牧師を尊敬している、とはっきり言うことができます。

そして、他者を尊敬することができるようになると、一つになれるのです。へりくだりがあるからこそ、私たちは二つあるものを神がキリストにあって一つにしてくださるのです。私たちは、概念的には、確かにキリスト者が一つであり、教会は一つであることを知っていますが、その霊的真理を実際の事柄にどこまで実現されているか、ということが重要なのです。それを取り扱っているのがピリピ人への手紙です。

それから、「2:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」ということなのです。1章では、自分のことではなくキリストを顧みることでした。そして2章では自分のことではなく、他者のこと、ということになります。しばしば英語の言葉で使いますが、JOY というのは、初めに J(Jesus)、次に O(Others)、それから Y(you)であります。初めにイエス様、次に他の人たち、それから貴方となっていれば、喜びに満たされることができるよ、ということです。これは、霊的成長そのものです。子どもが育つときは、まず自分がしっかりしていないといけません。しかし成長するにつれて、他の人たちの世話もできるようになります。そして大人になります。その段階で喜びがあります。けれども、次の段階に成長するからこそ喜びを持続することができ、私たちは神の愛を喜ぶことができるのです。